

続・戦国探偵団

文責：韓非（52期、執筆時高3）

教科書でも、単行本でも、新書でも世の中には「歴史関連」という本がたくさんある。私たちはその中のいくつかを拾って読むわけだが、どうも私は大まかな流れよりも、どうしてもよいところにふと疑問を感じることが多い。



岩倉使節団、左から木戸孝允、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利通

例えば、「藤原^{ふひと}不比等は鎌足の二男」と書いてあると、「では長男はどうなったのか？」と疑い¹、岩倉使節団の写真を見れば、「左から二番目は誰？」だの²、「桂小五郎（木戸孝允）と桂太郎は親類なのか」とか³である。これらは、大きな流れからみれば、まったく意味のない疑問だ。

だから、過去二年間、「長篠の戦い」「本能寺の変」を調べてきた中でも、こういう著にも棒にもかからないどうでもいい疑問が出てきた。その中で面白そう（？）またはどうしても論述したいと思ったものに絞って、論じていこうと思う。テーマは単発で以下のものである。相当に深い項目（特に ）もあるので、読み飛ばして頂いても、もちろんかまわない。

長篠の戦いで華々しい活躍をした鉄砲五奉行（前田利家、^{まつさき}佐々成政ら）のその後織田信長の後継者を決めた清須会議は羽柴秀吉のやらせ？

名将・真田幸村（大阪の陣で徳川家康を追いつめた）は実在しない!?

「本能寺の変」の動機解明の限界

信長・秀吉と同時代の軍記作家たち（太田牛一と^{ゆうご}大村由己）

この5テーマに絞った。有名なものからちょっと深いものまでである。これらを去年と同じく、できるだけ良質の史料・資料に頼って、探偵風に突っ込んで考えていきたいと思う。

1 藤原鎌足の長男は名前はわからないが、僧になったということを噂で聞いた。

2 他はみな有名なのに、左から二番目の山口尚^{なおよし}芳だけがまったく無名。佐賀出身でこの時外務少輔。その後外務で働いたが、表舞台には登場しない

3 この二人が親戚だという話は聞いたことがない。二人の生家もけっこう離れている。

ながしの

長篠の戦いで華々しい活躍をした鉄砲五奉行のその後

時は戦国時代、もちろん時代が時代だから戦が絶えない。戦があれば必ずと言っていいほど英雄が誕生する。湾岸戦争（1990年）であれば、パウエル（現米国務長官）、トラファルガーの戦い（1805年）ではネルソン提督（ナポレオンと戦って戦死）、という感じである。もちろん戦国時代にもそういうふうな戦があると、活躍して名をあげた人たちがいる。



例えば、桶狭間で今川義元を討ちとった毛利新介（良勝）、川中島で手勢を率いてつっこんだ上杉謙信、織田信長と激闘を繰り広げたさいかまごいち雑賀孫市、関ヶ原の戦いで敵軍の正面突破を図った島津義弘などである。

関ヶ原の戦いで炎上する島津本陣
（『関ヶ原合戦屏風』より）

しかしそういう人々は戦がおわって時間が経てば、忘れ去られてしまう。さっきの毛利新介などは表舞台からは消えたと言っていい。そして、そういう人物がその後バラ色の人生を送ったか、それとも地獄を味わったかは割と知られていない。ここではそういう人々の「その後」を語っていこうと思う。

今回スポットをあてる英雄（？）は次の五人である。

きささぐらのすけなりまさ 佐々内蔵助成政、まゐだまたげえもんじょうとしえ 前田又左衛門尉利家、ののむらさんじゅうろうまさなり 野々村三十郎正成、
ふくずみへいざえもんじょうひでかつ 福富平左衛門秀勝、ばんくろうざえもんじょう 塙九郎左衛門尉（別名：原田備中守直政）
はらだびつちゅうのかみなおまさ

おそらく 前田利家 はご存じだと思われる。少し歴史に詳しい人ならば 佐々成政、原田直政 あたりはわかると思う。が、野々村三十郎と 福富秀勝 はなんのこっちゃという感じであろう。

この五人の共通点はなんだろうか。まずは、五人は 織田信長（1534～1582）の家臣 であるということである。そして、彼らは信長のつくった 母衣衆のメンバーに入っていること⁴ である。そして最も重要な共通点は、

「1575年5月長篠の戦いで信長直屬として鉄砲奉行を務めた」ことである。

4 母衣衆というのは織田信長直屬のうまわり小姓・馬廻りから選ばれた名誉ある集団。いわゆるエリート集団である。この五人が入っていたことは『当代記』『高木文書』から明らか。

歴史研究会は2001年栄光祭で「検証・長篠の戦い」というテーマで展示を出し、そこで信長の鉄砲三段撃ちや武田の騎馬軍団、鉄砲隊対騎馬隊と言う図式を『信長公記』などを根拠に否定した（鉄砲隊の存在・活躍までは否定せず）⁵。その際に陣の中央で織田信長の命令で奉行として信長直属の千挺ほどの鉄砲部隊を指揮し、活躍したのがこの五人である。ここで便宜上彼らは**鉄砲五奉行**と呼ぶことにする。



長篠の戦いの激戦地跡。ここは全体から見ると中央にあたる。

しかしよく考えてみれば、鉄砲五奉行は長篠合戦で活躍というものの一世を風靡したわけでもなし、それほど有名なわけでもないから「英雄」とは呼べないかもしれない。だが敢えてこの鉄砲五奉行を選んだのは、その動向について良質の史料に残っており、その後の人生で明暗がはっきりわかれているからである。

では各人のその後の人生を論じていく前に、導入として賢明なる読者の皆さんに考えていただきたい問題が三つがある。

五人のうち、最終的に一番活躍・出世したのは誰か？ 五人のうち、長篠の戦い当時、一番役職が高かったのは誰か？ 討ち死に、切腹せずに天寿を全うしたのは何人？

この三つの課題について、少し考えていただきたい⁶。これからの話は、これらを解明する形で進めていく。

まずは各人の驚きの略歴からご覧いただきたい。なおこの略歴は主に『信長公記』^{しんちょうこうき}（信長の弓衆が同時代に書いた本）、『兼見卿記』^{かねみきょうき}（信長と親しい神官の日記）からとり、『信長の親衛隊』（谷口克広／著）、『立体分析織田信長の正体』（新人物往来社）、『戦国大名系譜人名辞典／西国編』（山本大ほか／著）などを参照にした。

⁵ 読者の皆さん、驚きになるかもしれないが、鉄砲三段撃ちは儒医・小瀬甫庵の捏造である。
⁶ 『信長公記』^{しんちょうこうき}をはじめとする良質の史料には全く記載がない。騎馬軍団は当時の軍役帳などから否定した。そしてこの「千挺」という数字は『信長公記』の陽明文庫本を根拠にしている。

6 ヒント： 加賀百万石 名字に注目！ 本能寺の変で死んだのは？

各人の略歴

[1] 前田又左衛門耐利家(1538～1599)



長篠の戦いでの前田利家

ご存知加賀百万石の祖。去年は大河ドラマでもやっていたから相当有名だろう。

1538年頃、利家は尾張荒子城主の四男として生まれ、犬千代、孫四郎、又左衛門と称し、信長の小姓として仕えるが、信長から勘気を蒙る。『信長公記』の初見は60年頃で61年森辺の戦いで、帰参を許される。以後活躍を重ね、**赤母衣衆**に任命される。さらに69年には家督を継ぎ、**75年長篠の戦いで鉄砲千挺の部隊を指揮**。同年越前平定後、**佐々成政**、不破光治とともに、越前2郡を領し、「府中三人衆」と呼ばれる。その後柴田勝家に従い、北陸方面軍として活躍して、81年能登を与えられるも翌年本能寺の変が起こり、利家は柴田側につくことになる。

83年賤ヶ岳の戦いで柴田と羽柴秀吉が対決するが、利家も柴田側で出陣している。しかし、途中で戦線を離脱し、柴田軍を敗戦の原因となる。以後秀吉側につき、出世を続け、加賀百万石の基礎をつくる。利家は余程秀吉に律儀に仕えたらしく、秀吉の嫡子・秀頼の後見役に任命された。1598年秀吉が病死すると、秀頼後見役として腕を振るうが病には勝てず翌99年死去。官職は**大納言**。娘の「まあ」は秀吉側室。

[2] 佐々内蔵助成政(？～1588)



長篠の戦いでの佐々成政

尾張比良郡の出身ということはわかるが、その父親、生年には説がまちまちとあって確かめられない。成政の兄は隼人正といい、1542年に今川軍と小豆坂で戦って「各々限りない手柄を立てた」七人に含まれているが、桶狭間で討ち死にしている（『信長公記』）。

成政の『信長公記』の初登場は56年、信長に謀反の噂が流れるところだがここはどうも怪しいから61年美濃での戦いとしておく。小部隊を指揮するほどの身分であったが信長直属の本隊に入って**黒母衣衆**となる。信長にしたがって各地を転戦し、**75年長篠の戦いでは鉄砲千挺の部隊を指揮**。同年、**前田利家**・不破光治と越前二郡を与えられ「府中三人衆」となる。以後北国方面で活躍し富山城主となる。

本能寺の変後は秀吉に反抗し、しばしば**前田利家**と戦う。その中で厳冬深雪の日本アルプスを横断して徳川家康を説得する。これが「**さらさら越え**」である(『家忠日記』)。しかし秀吉に降伏し、肥後一国を任されるが統治に失敗して国人(在地の武士)が蜂起した。そのため責任をとらされた格好で尼崎で切腹させられた。

奥田^{じゅんじ}淳爾氏はその著書『佐々成政』の中で、成政のことを、
戦国武将としてまことに優れた資質と手腕をもっていた
無益な殺生は好まない人道主義的な面もあり
一徹もので自らをとりたててくれた信長にあくまで忠誠を貫く。
このように評価している。

[3] 塙^{ばん}九郎左衛門尉直政(後に原田備中守と改名)(? ~ 1576)



長篠の戦いでの塙直政

尾張春日井郡出身。柴田勝家の女婿。はじめは信長直属の本隊に入って、その後**赤母衣衆**に選抜される。『信長公記』での初見は69年、信長に従って、北畠の大河内城攻めに参加するところそして信長上洛後に畿内の行政面で大活躍。木下籐吉郎(後の羽柴秀吉)、丹羽長秀^{にわながひで}などと組んで指揮するほどの身分であった。信長と足利義昭の対立では信長の使者をつとめるほど信頼が厚かった。74年京都府の南側の守護、75年には大和(現在の奈良県)の守護に任命され、同年**長篠の戦いでは鉄砲千挺の部隊を指揮する**。この直後、「原田」の性をたまわっている。

谷口克広氏は『信長の親衛隊』中で塙直政の存在をクローズアップしており、信長直属の部隊から二国の守護にまで出世した直政を「**三段跳びの出世**」といている。その要因として直政の優れた内政資質をあげている。たしかに『織田信長文書の研究』を見ると、直政の書状はけっこう多く見つかる。しかも、京都の公家である山科言継^{やましなとぎつぐ}や吉田神社の吉田兼見^{よしたかねみ}とも親交があったようである(『言継卿記』^{ことつぐきょうき}、『兼見卿記』^{かねみきょうき})。吉田兼見と親交があったといえ、明智光秀が有名であるが直政もそうだったのである。こういう人々との交流とは並の人物ではできないものではない。守護に任命されたあと直政は内政だけでなく軍事的な統率までもするようになる。

しかし、二国の守護まで出世した直政だが76年、明智光秀、筒井順慶らを率いていった石山本願寺との戦いであえなく戦死してしまう。谷口氏によると直政は本来内政などの吏僚的な武士であって、大軍の統率には不向きであったという。

[4] 野々村三十郎正成（？～1582）



長篠の戦での野々村正成

美濃出身ではじめは斎藤氏に仕える。その後信長に仕えて、信長直属の本隊に入る。その後**黒母衣衆**に選ばれる。『信長公記』での初見はなんと、**75年の長篠の戦いで鉄砲千挺の部隊を指揮するところ**である。それまでは出てこないのであるが、その後は荒木村重攻略、紀伊の雑賀攻めで検使をつとめるなどしている。また、正成は吏僚的な仕事を多くこなして、直轄領の代官をも務めている。

しかし、本能寺の変の時、二条御所にかけこみ織田信忠とともに討ち死にしてしまう。

[5] 福富平左衛門秀勝（？～1582）



長篠の戦いで福富秀勝

尾張愛知郡の出身という。信長直属の本隊に入って**赤母衣衆**に選抜される。『信長公記』での初見は塙直政と同じ69年、信長に従って、北畠の大河内城攻めに参加するところ。70年信長の使者となり朝廷にしる瓜を献上したりもしている。信長の近くにあって各地で戦い、**75年長篠の戦いでは鉄砲千挺の部隊を指揮**。直後、松永久秀の人質の成敗奉行（つまり死刑執行人の指揮）をつとめるなど、信長の側近として様々な奉行の仕事にたずさわっている。最後は信長の近臣

（小姓・馬廻^{うままわり}）の指揮官だったらしい。

しかし、82年本能寺の変の時に二条御所に駆け込み、織田信忠とともに討ち死にしてしまう。⁷

やはり[4] 野々村と[5] 福富は略歴がやけに短いし、表立っての活躍も多くないようである。マイナーキャラといわれるのも当然であろう。というのも、二人とも死ぬまで信長の官僚的役割を果たし続けたからだろう。官僚的な人間は普通、名前が残りにくい習性がある。

⁷ 各武将の顔は『長篠合戦図屏風・成瀬家本』から抜粋。顔だけだと福富が一番若々しく見えるがどうだろうか？逆に野々村はいかめしく見えるが……。

さて、これで各人の略歴を述べてきたわけだが、でははじめの問題にもどるとどうなるであろうか。

五人のうち、最終的に一番活躍・出世したのは誰か？

- [1] 前田 加賀百万石の領主
- [2] 佐々 肥後一国の領主
- [3] 塙 二国の守護
- [4] 野々村 信長の官僚
- [5] 福富 信長近臣の指揮官

上をみれば一目瞭然である。すなわち、一番出世したのは、[1] 前田利家である。やはり百万石にかなうものはそういるものではない。活躍したのも、豊臣秀頼のおもり役となって家康を抑制した前田といっていだらう。

五人のうち、長篠の戦い当時、一番役職が高かったのは誰か？

これは、[1] 前田だと考えた人も多いのではなかろうか。しかしそれは違うのである。谷口克広氏が述べているようにこの当時、塙直政は二国の守護を兼任している。それに対し他の四人はまだこの守護もまかされた形跡はない。そう考えると、**当時一番羽振りが良かったのは塙ということになる**。もちろん信長直属の鉄砲千挺の部隊を指揮するわけだから、おそらくまだ信長の本隊に属していたのだらう。



五人の主君の織田信長。野々村と福富は最期をともにした。

谷口氏は、塙直政についてはその活躍振りや一時の勢力の大きさの割に知られていない、といっている。しかも名前さえ適当に扱われている。だいたい人名辞典には「原田直政」で出ていることが多いが、「原田」は備中守に任命されたときに与えられた名字である。そうすると同時に名字を与えられた明智光秀は「これとう惟任」、丹羽長秀は「これずみ惟住」としてあつかわなければならない。そして「塙」の読みであるが、これは「はなわ」ではなく「ばん」が正しいようである。

話がそれるが、明智や塙が名字を与えられたとき（これは名誉なこと）前田たち四人はなにも沙汰をうけていない。それにこの四人は前に名字をもらったわけではない。だからこのことから塙が当時、明智や丹羽とならぶほど大きな勢いをもっていたことが裏付けられると思う。

第4章 個人研究（日本史関連）

ところで塙直政は76年に討ち死にしてしまうわけだが、わずか6年で信長直属の本隊付きから二国の守護まで昇進した。その勢いを特筆するに値する。

ここで「もし」などと言うべきではないが、塙が本能寺の変まで生きていたら清須会議（信長の後継者決定会議）に参加していたかもしれない。

討ち死に、切腹せずに天寿を全うしたのは何人？

- [1] 前田 1599年病死 [2] 佐々 1588年統治失敗の責任をとり切腹
[3] 塙 1576年本願寺攻めで討ち死に
[4] 野々村 1582年本能寺の変で討ち死に [5] 福富 野々村と同じ

つまり、生き残ったのは前田のみである。他は皆切腹やら討ち死にやらで死んでしまった。佐々の切腹についてはいろいろと議論がある。奥田淳爾氏はそれについて、成政が責任を押しつけられた、と論じている。一方、成政を切腹させた豊臣秀吉はその後、成政の罪状をあきらかにする手紙を各地に送っている⁸。

「おれは何度も成政を寛大に見てやった。しかし成政は、肥後の武士を強引に攻めたせいで、大問題に発展してしまった。そこで肥後の武士の方は征伐したのに成政を生かしておいたのでは喧嘩両成敗の原則にも背くから不憫ながら切腹させた。」

こんな内容である。この奥田氏の意見と秀吉の手紙をみると、成政が悪いと言えば悪いし、悪くないと言えば悪くないような感じをうける。しかし、佐々が肥後の統治を任されたのは気の毒な気もする。なぜなら肥後の地は諸勢力が割拠していて、どうも抑えにくい地であつたらしいからである。

塙についてはさっきくどいほど述べておいたが、やはり重臣の死は惜しい。

野々村・福富は本能寺の変で討ち死にしているが、この二人に象徴されるように、ここでは信長の官僚のほとんどが討ち死にしている。残ったのは堀秀政ら数人である。こういうことから、やはり本能寺の変は大きな出来事であつたのだ、と感じる。

ところで、『増補 織田信長文書の研究』（奥野高広／著）という本がある。この本にはとにかく信長に関係する文書が集められているのだが、もちろんあの五人の関連する書状も入っている。すると、一番書状がすくないのが野々村正成で、同じくらい福富秀勝のも少ない。やはり二人が無名なのもやむをえないのだろうか。

8 秀吉のこの手紙は縦46.2cm、横227cmある非常にダイナミックな文書であって内容・大きさともにトップクラスらしい（『秀吉の手紙を読む』染谷光廣）

逆に一番多いのが、前田利家ではなくて埴直政で畿内での活躍振りがうかがわれる史料が非常に多い。残った前田利家と佐々成政だがこれは不和光治とともに連名で出している書状にけっこうある（八通ほど確認）。これは75年長篠の戦いの後で佐々と前田と不破が「府中三人衆」として柴田勝家の補佐・目付としてつけられたからである。

そこで、よく考えてみると、前田と佐々はライバルである。二人とも母衣衆、長篠の戦い、府中三人衆とだいたい道を歩んできた。結局は佐々は切腹させられてしまうのに対し、前田は加賀百万石となるのである。そして前田は佐々の



旧領も治めることになった。奥田淳爾氏によると旧佐々領では佐々に心服する人々が多いため、佐々の悪い噂を流して切り崩そうとしたらしいのである。実際、前田方の記録には佐々が悪く書かれていることが多いのである。

例えば、前田利家には、「信長の小姓時代に利家を愚弄した同朋衆・拾阿弥を斬って勘気を被って織田家にいられなくなった」という話がある（『利家夜話』）。

府中三人衆の連署（福井県今立市・三田村家文書）右から、前田、佐々、不破

この話は必ずドラマでやれば出てくる場面である。しかし実はこの話には佐々成政が悪役で登場している。その話を詳しくいうと、以下の通りになる。

「まず、信長の同朋衆（取り次ぎのお坊さん）の十阿彌じゅうあみが利家のこうがい（髪の手入れに使う物）を盗んだ。そこで利家は信長に十阿彌を成敗をすることを申し出たところ、佐々成政らがこの度だけは許してやってくださいととりなしたため、十阿彌は成敗されずに済んだ。しかし十阿彌がその後も利家を笑いものにしたため、利家が成敗した。」（『利家夜話』）

この根拠は『利家夜話』という史料である。ただこの史料はそんなに有名な史料ではないし、信憑性についてもあまりいい評価をもらっていない史料である。その傾向としてどうも利家におべっかをつけているところがあるようである。それに同朋衆の坊さんが、小姓（この時利家は小姓）の櫛やらを盗むなどという話は他にきいたこともない。

もう一つ言っておくと、佐々成政が嫌な役で出てくるからどうも怪しい。しつこいようだが前田寄りの史料というのは得てして佐々を悪役にしがちであ

乱してきた秀吉軍に攻撃を加えていた。まだ立ち直る兆しはあったのである。しかし、その後ろの茂山にあった前田利家が退却した（『賤ヶ岳の戦』）。これにより前田の逃亡は後方からは佐久間隊の敗走に見えて、総崩れとなった。この時利家は秀吉に内通していたらしい。

逃げ帰った柴田勝家は、利家が裏切ったにも関わらず彼のもとを訪れた。そこで柴田は前田に対してその裏切りを攻めないで年来の交友に感謝し、秀吉に降参しろ、といて柴田がとっていた人質を返してやった（『賤ヶ岳の戦』）。裏切った相手に昔からの交友を感謝するなど並の人間ができることではない。これをみると柴田はまことに立派な人間である。そこにきては利家の卑劣さばかりが目立つ。利家の行動は生きのこるための戦術であり、ここで弾劾しようとは思わない。しかしこのことがあまりに知られていないのでここで述べたのである。

さて、話は相当にそれてしまって前田利家のことばかり話してきてしまったがこれはしょうがない面もある。それは前田の知名度と史料が他の四人に比べて圧倒的に多いからである。そんなわけで前田だけが甘い汁をすっているわけだが、ほかの四人も決して力がなかったわけではない。少し状況が違って入れれば、違う結末もあったかもしれない。

ここまで、長篠の戦いで鉄砲千挺の部隊を指揮した五人のその後を見てきたが、その末路を見ていくと、まさに十人十色である。福富と野々村は信長の官僚として大いに力を発揮した。前田は着実に力を伸ばして日本を代表する大勢力となった。佐々は織田家に忠誠をつくし、真冬の日本アルプスを越えてまでやるほどのすばらしい武将であった。そして塙は内政で大活躍したが、惜しいところで壮絶な最期を遂げてしまった。

討ち死にするもの3人、切腹1人、無事生存1人。こうしてあの山ばかりの長篠の地で同じ役割を演じた五人の「その後」の生き方を見てみるとまさに感慨無量である。

^{きよす}清須会議は羽柴秀吉の「やらせ」?!

読者の皆さま、清須会議をご存じであろうか。もちろん読んで字の如く、清須での会議⁹。清須は現在の愛知県で前に織田信長がいたところ。それではま

9 「清須」とも「清洲」とも書くらしい。尾張（現愛知県）の要の城

第4章 個人研究（日本史関連）

まったく説明になっていないから、少し詳しく説明すると、まず1582年にあった大事件から。

1582年といえば次のうちで、どの事件があった!!?

、関ヶ原の戦い、本能寺の変、山崎の戦い、応仁の乱

だけ？それとも？片方だけではダメです。とと両方1582年にありました（両方あげていないとまったく点をくれない採点もあります）。

さて、本能寺の変といえば織田信長が天下統一の途中に家臣の明智光秀に殺された事件。なぜ光秀が殺したのか - その動機というのはいまだ謎に包まれていて古今東西解明できたものはいない。かく言う歴史研究会も去年、動機の解明に取り組んだが、結局無理であった。織田信長とは……。短くいうと、愛知県の方から上洛して、当時の日本でトップクラスの権力を手にしていた人物である。



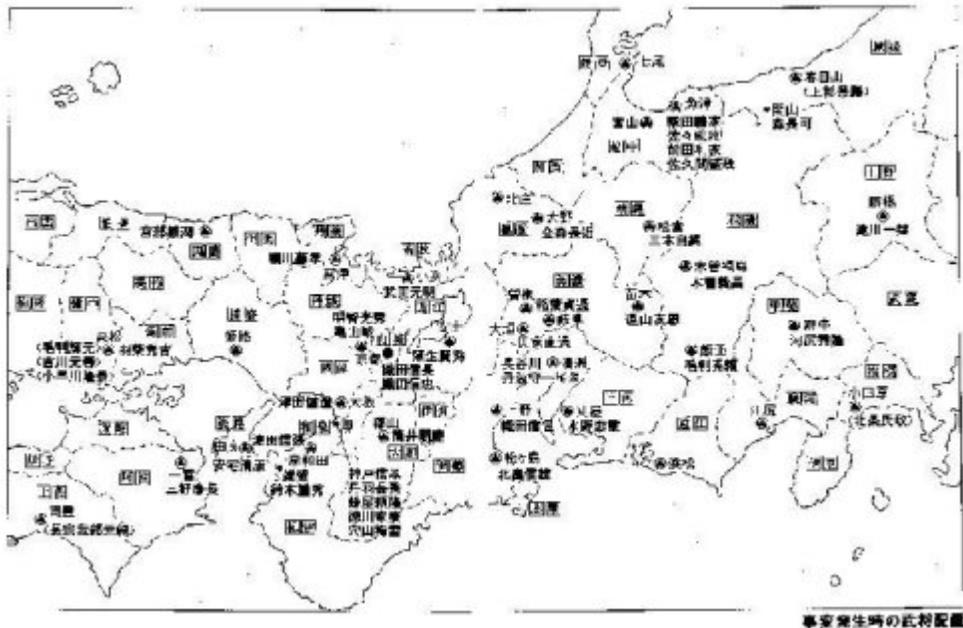
織田信長 絶大な力を
手にするも本能寺の変で
討ち死に。

つまり信長が殺されたわけだが、信長の家臣団も黙ってはいない。つまり、この時代よくあったことだが、あけちみつひで明智光秀は主君を殺した謀反人であるので、家臣団達はここで逆に光秀を討ちとれば、逆に信長の後継者となれると考えた。

ところが、光秀だってその家臣団が帰ってくるのをぼうぜん呆然として待っていたわけではない。いろいろと毛利だの上杉だの地方の勢力と連絡を取ってうまく家臣団を身動きできないようにしようとしたらしい。当時、光秀を討ちとれるだけの軍事力を持っていたのは、次の五軍団（次ページの図参照）

、まやばし上野厩橋（現在の群馬県）のたきがわかずます滝川一益
、越前北庄（現在の福井県）の柴田勝家
、三河岡崎（現在の愛知県）の徳川家康¹⁰
、岸和田（現在の大阪府）の織田信孝（丹羽長秀）
、備中高松（現在の岡山県）のはしば羽柴秀吉

10 徳川家康は信長の家臣ではないが、当時の地位から見て信長の家臣級と見てよいし、光秀を討てる軍事力も持っていた

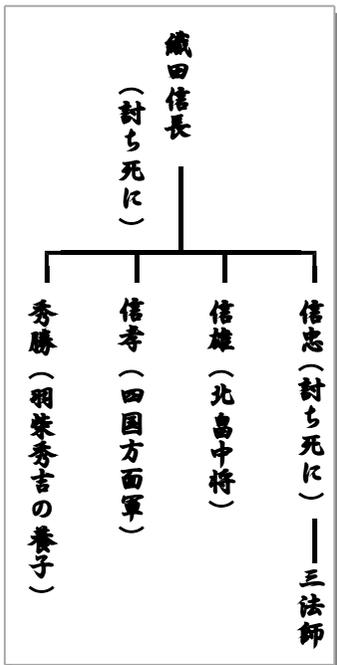


この五軍団と見て良いと思う（あとあと重要になるのでできれば覚えといてください）。このうち早急に帰ってきたのは、羽柴秀吉だけ。他は遅れるか、崩壊するかのどちらかである。光秀にすれば一つでも早急に帰ってくればダメなわけだが、五軍団のうち四軍団まで対応に遅れているのを考えてみると、光秀も絶妙なタイミングと工作をしたのであろう。

こうして秀吉はわずか一週間ほどで岡山から大坂までもどってきた。これを「**秀吉の中国大返し**」という。この大返しが多分に早すぎるために、秀吉は事前に本能寺の変を知っていたとか、秀吉が黒幕だったとかいう説が出るに至ったのだが、秀吉の大返しは、普通の人間でもできることであり不可能なことではない。だから秀吉黒幕説などは何ら深い根拠がないものである。

さて、大坂あたりまでもどってきた秀吉の方には岸和田にいた織田信孝、**丹羽長秀**、そして摂津衆（**池田恒興**、中川清秀ら）が合流して一気に兵力がふくれあがる。その勢いで明智光秀とぶつかったのが**山崎の戦い**である。いわゆる天王山とか洞ヶ峠ほらがとうげとかの故事はここが出典らしいのだが両方とも史実に照らすとウソである。そこで勝ったのは秀吉の方であって光秀は敗走途中に殺されてしまったらしい。ちなみに明智光秀の「三日天下」というのはこれもウソで正確には十日ほどである。ここで重要なことは羽柴秀吉が明智光秀を討ったことによって「**秀吉は謀反人光秀を討った**」という**大義名分**（皆が納得する根拠みたいなもの）を手に入れたことである。

第4章 個人研究（日本史関連）



山崎の戦いの2週間ほど後、信長の後継者と遺領をどう分配するかを決める、会議が清須（現在の愛知県）で開かれた。この会議こそが**清須会議**である。『川角太閤記』によると秀吉は会議に信長の孫の三法師（後の秀信）を抱いて出席したという。その結果、**信長の後継者は三法師、羽柴秀吉は山城**（現在の京都府）など有益な領地を獲得した。秀吉の抱いた幼子（三法師は当時そのくらい）が織田家を継承したということは、形式的にでも秀吉が織田家で実力ナンバーワンに躍り出たと言っているであろう。

つまり秀吉の一人勝ちとはいわないまでも、秀吉はこの会議で織田家の中で非常に大きな力を持つようになったのである。その後、賤ヶ岳で旧重臣・柴田勝家を破り、関白・太政大臣となって四国・九州・関東・奥州と順に制圧して行って天下を統一するのである。そこからみると秀吉の力が大きく伸びた清須会議は歴史的に見ても無視できないものだと思う。

さてここで私が疑問に思ったのは、**どうして秀吉が清須会議で力を伸ばせたか**ということである。もちろんそれは通説でいわれているように、「山崎の戦いで謀反人・明智光秀を討ったことで大義名分を得て、主導権をとった。」というのもあるであろう。山崎で勝つことによって信長の後継者というのを行動でアピールしたのだから、無論正しい説だと思う。

ところがここで一つ問題になる記事がある。それは『イエズス会日本年報』の記事なのだが、会議前には信長の後継者は信長の三男・信孝だと見られていたようである。つまり三法師は挙がっていないのである。確かに『イエズス会日本年報』の記事には感情的に成りすぎる記事もあるのだが、ここはうさだからだいたい事実を表現していると思われる。それに、織田信孝は四国方面軍の司令官に任命されていたし、山崎の戦いにも参加している。秀吉が山崎の戦いの勝利で力を伸ばしたなら信孝も参加しているわけだから、評判はあがっているはずである。

ということは、秀吉は下馬評をくつがえして、三法師を後継者の座につけたわけだが、これは山崎の戦いの勝利だけでできるものなのであるかと疑問が残るわけである。無論、不可能なことではないがそれだけでは難しいと思った私はいろいろと調べてみたら、高柳光壽氏の指摘するとおり**清須会議のメンバーに原因がある**と考えた。

従来から清須会議には信長の遺臣が出席したとか、重臣が出席したとかいわれてきた。果たしてそうなのであろうか？そこで出席したものを挙げてみると次の四人である（織田一族を除く）。この四人がキャスティングボードを握っていた、とみていい。

羽柴秀吉 いけだつねおき**池田恒興** **丹羽長秀** **柴田勝家**

このメンバーに大きく問題あると思われる。まずこの会議にはどういう者に参加資格があるか？ということが疑問になってくる。昔からいわれているのは重臣である。しかし何が重臣なのかまったく説明がないからサッパリわからない。この四人の共通点を探ってみても織田の古参である家臣であること以外にはどうも見出せないのである。（織田古参のものなら他にもいる。）

いわゆる各方面司令官（重臣と言っていい）といっても、羽柴秀吉は中国司令官、柴田勝家は北陸司令官だけれども、残りはそれより格下の遊撃軍の司令官である。（谷口克広『信長の親衛隊』）おや、丹羽長秀は四国方面司令官ではないのか？という人もいるかと思うが、これは後で詳しく説明するがとりあえず秀吉や勝家とは同格ではない。しかも先ほどあげた五軍団（＝方面軍）のうち滝川一益が出ていないのである。（徳川家康は他家のものだから出ないのも無理はない。）方面司令官だけ出席すると、下の三人になるが実際はそうっていない。

羽柴秀吉 **滝川一益** **柴田勝家**



滝川一益について少し詳しくいっておくと、彼は武田征伐で手柄を挙げて、関東方面の司令官であった。つまり秀吉・勝家らと同格である。だから彼らが出ているのであれば、一益も出席していてもおかしくはない。（大河ドラマ『秀吉』では堂々と出席していたがそれはウソらしい）ところが彼は本能寺の変がおこったとき、それを知った北条氏と戦って敗れてしまったため、なんとか帰って来れたようなありさまであった。

滝川一益 本能寺の変
で一益の人生は激変する。

このため清須会議に
加えられなかったという可能性があるので、楽に帰って来れたわけではない柴田勝家も出席しているところを見ると、疑問が残る考え方である。しかし以上のような理由で出席していなくても無理はないと思う。それよりも可哀想なことに、本能寺の変で北条氏

第4章 個人研究（日本史関連）

に負けたことからはじまって一益は人生が振るわなくなってしまうと歴史の表舞台から消えてしまう。

ところで羽柴秀吉・柴田勝家、この二人の出席は当然と言っている。二人は当時織田家中でトップクラスの力をもっていたからである。残りは池田恒興と丹羽長秀である。そこでこの二人について考えてみる。

池田恒興がこの会議に出たことについては前々から疑問に思っていた。結構マイナーな人物であるし、果たして彼は重臣なのだろうか。そのたびに「池田は信長の乳兄弟¹¹だから」といわれて納得してきたがそこが問題なのである。乳兄弟という扱いなら一族扱いというような気もするが、恒興が一族扱いを受けた、ということは聞いたことがないし、文献で見たこともない。むしろ彼は信長の「近習」だといわれている。近習というのは前田利家とかと同じレベルの話である。そんなわけで恒興は一族扱いされて出たのではなさそうである。

そうすると「信長の乳兄弟」という説明はわけがわからなくなる。

では軍事・政治面から考えてみると、恒興は秀吉ら方面軍を補う遊撃軍の司令官である。要するに方面軍にはせ参じるわけだから方面軍の司令官よりも格下なのである。谷口克広氏によると恒興は摂津一国の支配を任されていたらしいが、その地位はとても秀吉ら方面軍司令官にはおよばないものである。恒興の出席は軍事・政治面からも説明できないのである。

丹羽長秀は納得できる、という読者が多いのではなかろうか。長秀はなかなか名も知られている。それに秀吉が名字の「羽柴」を名乗ったとき、軍事の中心・柴田勝家から「柴」を、内政の中心人物・長秀から「羽」をもらったというふうに重臣として名が通っている。しかし、そこに問題があるのである。

長秀の略歴をまとめてみると、少年期から信長に仕え、信長が上洛したときには秀吉らと共に京都・畿内の行政に携わっている（『織田信長文書の研究』）。その他、武功も多く様々な奉行も務めており特に安土城の普請奉行を務めるなど功績は大きい。しかし、谷口克広氏は以下のように指摘する。

「単独で大敵と対峙したこともないし、主力を構成したこともない。1個の遊撃軍の指揮官にすぎない。領国も小国若狭だけであり、一般にとらえられているほど織田家におけるその勢力は大きくない。本能寺の変直前の四国攻めも（織田）信孝に添えられた副将の1人に過ぎない。」

11 信長の乳母が池田恒興の母だった、ということ



丹羽長秀 織田家中
での影響力あまり大
きくない

長秀の地位については、たかなぎみつとし高柳光壽氏もほぼ同様の見解を出るらしく、ここから考えると長秀は昔からいわれてきたように「織田家の重臣」ではない。つまり先ほども出たが、池田恒興、丹羽長秀ら遊撃軍司令官というのは秀吉・勝家ら方面軍司令官からみるとワンランク下なのである。だから、軍事面から見ると長秀の出席には疑問が残るわけである。

ところが、以下のようなことをいう人がいる。

「軍事面からしか見ていないからそんな疑問が出るのであり、内政面から見れば、当然長秀は出席すべき人物だ。」

しかし長秀は当時、内政よりも軍事（四国攻め）の方にまわされていたのであるから、上のような意見は成立しないはずである。

もう一つ注意すべきは、傍線部（前ページ）の記事である。これは長秀の当時の地位をくっきりと示すものだといってよい。ここで信孝は四国方面軍の司令官と考えられるから、その下についた長秀は明らかに方面軍司令官よりも格下である。

以上説明したように、従来からいわれている「清須会議には織田家の重臣が出席した」という説には到底賛成できない。池田恒興と丹羽長秀。この二人には重臣という言葉があてはまらないからである。

つまり、池田恒興も丹羽長秀も本能寺の変以前の地位から考えれば、羽柴や柴田と比べると、重臣とはいえないような位置にあり、本来会議にはでられないはずであった。

では何故出席できたのか。まず、この二人の共通点を探し出してみると、

、山崎の戦いに参加している

、織田家に相当前から仕えている

上の2点しかない。ズバリ、これこそが二人が出た理由であったと思う。それは によって謀反人・明智光秀を討った！つまり織田家のために仇を討った、ということで大義名分ができるからである。さらに突っ込んでみれば、二人とも山崎の戦いで明智光秀を破った人物であり、言い換えると羽柴秀吉と一緒に戦った人物である。要するに二人とも秀吉と比較的親しい関係にあった者である。戦後、特に問題がおこっていないことからそう考えていい。そして共同で

第4章 個人研究（日本史関連）

戦うというのは仲が悪い状態ではできないことである。以上から歴史的事実から照らし合わせて分かるのは、**二人とも秀吉に悪いイメージをもっていなかったこと**だけである。

もう一つ、これは歴史的事実とは認定できないのだがこの二人が秀吉に買収されていた可能性があるのである。秀吉はニコポン¹²の名人であったといわれている。確かに秀吉に会った人物は、安国寺恵瓊^{えけい}にしても前田利家にしてもコロッと参ってしまうところがあったし、賤ヶ岳の戦いでは相当に柴田側の買収で力を発揮している。¹³

要するにここで二人が秀吉の味方になっていた、とはいわないまでも悪い感情をもっていなかったことは事実である。その後のこの二人は終始秀吉のイエスマンをつとめていることからこのことは裏付けられると思う。清須会議の出席者を誰が決めたか知らないが、これは主導権をにぎりつつあった秀吉がそれとも山崎でともに戦った織田信孝の可能性が高いと思う。秀吉が会議の出席者を決めた場合は意図は明白である。つまり極論してしまうと、秀吉は池田恒興と丹羽長秀を味方につけておいて、「二人とも古参の家臣だから」という理由で会議に参加させた、ということである。また織田信孝だった可能性もあるが、その場合池田恒興、丹羽長秀はともに山崎で戦った戦友であるから、そのことによって出させたのかもしれない。

しかし、ここからは状況証拠から推測するしかないが、秀吉が強引に決めた可能性の方が高いと思う。それは何よりも会議内で秀吉の言い分がだいたい通っているからである。むろん柴田勝家に長浜城（秀吉の居城）を渡したりもしているが、これも柴田が欲しいといったとはとても考えられない。会議の進み方と結果が秀吉にとってあまりにうまくいっているのである。これは明らかに「やらせ」である。



柴田勝家 本能寺の変にちょうど上杉と激戦中だったのですぐ戻ってこれなかった。

12 にこにここと相手の肩をぼんと叩き、親しそうにうちとけて人を懐柔する態度。桂太郎首相の政党懐柔策にたいする評語。

13 賤ヶ岳の戦い（83年 対柴田戦）では前田利家、^{かなもりながちか}金森長近を秀吉方に内通させ、84年には織田信雄の三家老を秀吉方に内通させ小牧長久手合戦の原因を誘発する。徳川家康家臣の石川数正も秀吉方に内通の噂が飛び交い、徳川家を出奔。

それに信孝がうるさくいったことは聞いたことがない。

うだうだと推論を重ねても本題から離れていくばかりなのでいってしまうと、結論としては以下の通りである。

、丹羽・池田は山崎の戦いで信長の仇を討って、さらには古参の家臣だから本来出られないはずの清須会議に参加することができた。

、丹羽、池田は山崎の戦い後、秀吉に悪い感情をもっていなかった。

、そのため、会議では柴田側に対して、終始秀吉側が優位を保ち続けた。

、これは推論であるがその後の行動から見ると、この二人は会議前にすでに秀吉の味方であった。

、さらにいうと、会議の出席者を秀吉が決めた場合は、秀吉がこの二人を強引に出させた可能性がある。

ここで確実に言えることは、清須会議には秀吉に悪感情をもっていなかったものが二人も出席したということである。秀吉が出席者を決めていたにしても、決めていなかったにしても山崎で池田恒興や丹羽長秀などの古参の武将と共に戦えたことは、秀吉の運のよさである。しかし、丹羽や池田に悪感情を与えず、そのまま清須会議に持ち込んだことは、さすがとしかいいようがない。



この秀吉寄りの二人が出たことで、会議は一気に秀吉有利に進む。柴田は反秀吉派だが、秀吉・池田恒興・丹羽長秀と三対一ではまったく勝ち目はない。結果として秀吉は信長の後継者としての、そして天下人としての大きな足場を築くことになる。

羽柴秀吉 本能寺の変後、迅速な行動で

明智光秀を討って大義名分を得る。

清須会議は「やらせ」とまではいわないけれど、あそこまで秀吉の自論見通りにいったのは、出席者にもカラクリがあったからであるように思われてならない。

真田幸村は実在しない!?

このテーマでは、どうも気になることもあって、登場回数の多い人物であるからいちいち説明するのも煩わしいことので、ここで少し言っておきたいのである。



真田幸村戦死之碑
(大阪府の安居神社)

まず真田幸村とは、大阪の陣で徳川家康が豊臣家を滅ぼしたとき、豊臣側について大奮闘した人物である。家康を後一步のところまで追いつめたが力及ばず、討ち死にしてしまった。そして幸村の父の昌幸も関ヶ原の戦いで徳川軍を足止めしているから、「親子二代で徳川を苦しめた」とよくいわれるのである。その後幸村は家康を追いつめたという事で、やたら人気が出て戦前には立川文庫でもその伝説が出版されて、大豪傑みたいな感じになってしまった。猿飛佐助ら真田十勇士が登場するのもその中である。つまり戦前のヒーローで今でも多くの方々から、尊敬されている戦国時代の英傑とされている。

しかし、どの本を見てもだいたい「真田十勇士はモデルとなった人物はいるが実在しない」と書いてある。それに真田十勇士の名前は確実な史料には出てこないからどうも架空の人物らしい。ここまではご存じの方々もおられるかもしれない。

問題は次である。本能寺の変を調べている間にたいへんな事実にあたってしまった。それは高柳光壽氏の『戦国の人々』だったと思うが、**真田幸村の実名は「信繁」である**、と書いてある。とすると「幸村」は何なのか。ということになるが、その本によると後世つけられた名前らしい。「幸村」が実名でないというのは非常に意外である。

そこで、手元の史料にあたってみた。今は後輩にやっけてしまってもっていないのだが「真田史料集」という上田市（真田氏の地元）で発行している古文書集である。古文書集であるから結構多くの古文書が入っている。そこで「真田幸村」のところを見てみると、古文書の署名はすべて「信繁」となっており「幸村」などという署名は全くない。これで、だいたいわかった。つまり高柳氏のいうとおり「信繁」が本名である。そして「幸村」という署名はないわけだから「幸村」となどは名乗っていないのだということになる。この古文書類が動

かぬ証拠である。ただし「幸村」と書いた書状が出てくれば話は別であるが、そんなものは今のところみることがない。こういう研究というのは今ある史料で答えを出すしかないわけである。

しかし、「真田氏系図をみれば、幸村になっているではないか」という反論もある。だが、そもそも系図とはまったくあてにならないものである。つまり参照にできないものである。というのは、後々作られたものであり、たいして調べもせずに名誉を目的として作られるものだから俗伝に流されやすいのである。

しかも、広辞苑などを見ると

「真田幸村……名は信繁、幸村は俗伝」

とかいてある。俗伝というのは俗世間の言い伝えであって本名ではない。これによって先ほどの話が裏付けられるわけである。

ここで、一つ疑問がある。それは「真田史料集」の中で、「信繁」という署名の古文書しか載せていないのに、その章の名前が「真田幸村」となっていることである。これなどはまったく史料をバカにしたものであって、自分で間違いを露呈しているようなものだ。



結論とすると、現状では「真田幸村」という人物の存在は認められない。しかし「真田信繁」という武将は存在する。

「真田信繁」は端的に言ってやはりすばらしい武将であったと思う。そして全国に真田関連の史跡がたくさんある。しかし全てと言っていいほど「幸村」の史跡である。それから「真田幸村」を尊敬したり、好意的にみる人々、いわゆる真田ファンは相当多いように思われる。しかし、もし今述べてきたことを知らないものがいたら、「真田信繁」がかわいそうである。いかに敬われても、俗世間の言い伝えに惑わされて、名前を間違えられてしまうということほど、いたたまれないことはない。

大阪城内であった展示。「真田幸村」と表示してあった。
(『大坂の陣合戦図屏風』)

動機解明の限界

歴史研究会は前年、「本能寺の変」を研究した。「本能寺の変」というのは、戦国時代の覇者・織田信長が家臣の明智光秀に殺害された事件で、光秀がどうして謀反を起こしたかについては、戦国時代最大の謎とされ、わかっていない。我々が研究する際において、このことはどうしても避けては通れない道であった。なぜなら光秀の謀反原因によって事件の全貌というのが大きく変化してしまうからである。謀反原因には、「野望説」「怨恨説」「朝廷黒幕説」などから「千利休黒幕説」「森蘭丸黒幕説」までありまさに百家争鳴である。そこで突っ込んで研究したが結局解明できなかった。そんなわけで、サジを投げたわけではないけれど「わからない」ということを結論とした。

当初、この結論には心配であったけれど、どうみても埒があかないほど、状況が複雑で絞ることができそうにない。



旧本能寺跡（昔あった場所にはこの石碑が残るのみである。）

しかし、栄光祭当日になると、「本能寺の変」はなかなかメジャーなテーマらしく、いろいろな人がきた。その中には、自分の推論を熱く語る人もあれば、説の多さに驚く人もおり、さらには「強引に結論をだすよりもいい」といってくれる人もいた。

つまり、我々はどうしても解明できないから、有力な説を展示したり、ポイントとなる問題を紹介したりして判断は読者のみなさまにお任せしたのである。

明智光秀 その謀反の原因はいまだ解明されていない。

さて、その展示が終わって考えてみたことだが、どうもこの問題はこれから新史料が出たとしても、百年経っても解明できそうにない。逆に解明されてしまえば、もう我々が魅力を感じている「本能寺の変」ではなくなってしまう。

そう考えてみると、これは負け惜しみかもしれないが動機解明という行動自体に疑問を感じるのである。もはやこれは歴史ではないが、現代でもだいたい犯罪者がつかまるとすぐに「動機は？」ということになる。犯罪者が動機がわからない状態でも「未



必の故意」とかなんとかで、動機ということになるのである。これはつまり動機から事件の全貌を描き出そうというのであるが、果たしてそれは万能の考え方なのだろうか？つまり動機探索以外にも事件の全貌に迫ることができるのではないか。逆に事件の全貌から動機に迫ることはできないだろうか。

これを「本能寺の変」の中で考えてみると、昔はやたら動機解明ばかりに重きが置かれていた。それが「野望説」だの「怨恨説」などという説である。しかし、それでは解明できないことに研究者は気づいたらしく、今度は事件の全貌から逆に動機に迫り始めた。それは「朝廷黒幕説」や「足利義昭黒幕説」であって朝廷や足利義昭の動きをあきらかにすることで、事件の全貌がわかり動機もわかるという手法である。しかし、これは両方ともうまくいっていない。どうもこの手法にも限界があるらしい。それではどうすればよいか？まったくわからない。しかし、何か新しい手法が出たときに、また新説が出ることになるのだろう。

「本能寺の変」はこういう風に切り方次第で多様に考えることができるが、現状の資料・史料の状態ではいつまでも解明できない事件であり続けるだろう。

信長・秀吉と同時代の軍記作家たち（太田牛一と大村由己）

先日、池宮彰一郎の『島津奔る』が司馬遼太郎の『関ヶ原』を盗作したとかなんとかで問題になった。私は歴史小説なるものがあまり好きではないがとにかく盗作はよくないことである。そこで、池宮氏がいていた内容はよく覚えていないのだが、「史料と混同してしてしまった」などといったような気がする。

では、「史料」¹⁴ならば盗作していいのだろうか。この言動にかんする限り、いいとも悪いともいっていないようである。しかし小瀬甫庵の『太閤記』をもとに書いたら捕まった、なんて話は聞いたことがないから、法的に問題はないのであろう。盗作の定義は「他人の作品の全部または一部を自分のものとして無断で使うこと。剽窃」というものである。

14 「史料」とは歴史の研究または編纂に必要な文献・遺物。文書・日記・記録・金石文・伝承・建築・絵画・彫刻など

第4章 個人研究（日本史関連）

よく考えてみればこうやって書いている我々だって、引用したりするときは本人に無断でつかっているのである。しかし、いちいち本人に許可をお願いに行くのは非常に面倒な話だし、第一に円滑な研究の妨げになる。そこで仕方なく参考文献を明示してごまかす、という手法をとっているわけである。これで何とか著者に対する一定の敬意というものを示している。

しかし、それに対して歴史小説はどうか。池宮氏の言葉から伺えるとおり、小説家は史料をつかっている。遠藤周作であれば『武功夜話』をつかっているし、北方謙三なら『正史三国志』をつかっているだろう。このようにして歴史小説というのは史料なしには存在しないのである。小説家は史料をもとに自分の世界観を展開してゆくのである。それは実に結構なことである。

そこでは、小説家の自由な世界観が展開されるわけであるが、あくまでそれは「史料」を舞台として借りているのである。

はっきりいってしまうと、史料と作家の世界観が両方あって歴史小説というものは成立するのである。どっちがかけてもいけない。ところが世の中の風潮を見てみると、作家の世界観というものは注目されているが、史料の方はまったく注目されていない。それは史料の方が数が少ないからであろうと思うが、作家の世界観のみが一人歩きしているような状況である。さらにはそれが史料を凌駕するようになってしまっている。つまり、歴史というものを考える際に大衆小説家のイメージが大きく、史料を踏みつけているようなイメージさえうけることがある。しかし、人はどうも面白いものに飛びつく習性があるから、大衆はそれでいいかもしれない。

しかし、その風潮が史実を考える上でも大きくのしかかっている感じをうけるのである。確かに歴史小説は面白いものである。しかし、史実を調べていく際においては、作家の史観というものはまったく史実と関係ないものである。そのところが混同されて、作家の世界観 = 史実みたいなものになってしまっているのである。はなはだしくは「司馬史観」というものが史実性の中でまことしやかに横行するありさまである。未だに山内一豊やまのうちのかずとよの内助の功の話が真実だとして語られている（明らかにウソ）。

また、歴史小説でも史料を軽視する状態になってきた。勝手に史料をつかうのは明らかな盗作である。最後の一言でも何々を参照にした、と書くべきである。確かに作家の世界観はすばらしいものがある。しかし歴史小説の中では史料も大きなウェイトを占めていることも事実である。そのことを忘れて「全部自分が書きました」みたいな感じで終わらせるのはいかにも傲慢ごうまんであると思う。

先ほどから「史料」、「史料」とやかましくいつてきたがそれにはわけがある。まず史料は過去の人々が伝えてきた偉大な遺産だと思ふからである。史料は書く人がいなくては始まらない。そしてさらにはそれが現在まで伝えられるためには地震あり、火事あり、戦争ありで、大変な労力が必要であろう。そこまでして伝わってきた史料は決していい加減にできないものだと思うからである。

小説家が自分の世界観を展開することは、確かに易しいことではない。しかし、これまで史料が伝わってきたことの方がずっと難しいことであることは間違いない。そのことが昨今の風潮ではまったくわすれられている。これはまことに困ったことだといわねばならない。

そういう史料に対して歴史小説家は恩恵をうけているわけだから敬意を払わねばなるまい。しかし現状では、一体どれくらいの歴史小説家が史料に敬意をはらっていることだろうか？

そこで、現在まで伝わってきた史料の中でなかなか味のあるものを二つあげたい。私は三国志と戦国史が専門だから(といて特にできるわけではないが)その範囲の中でしかわからないが、その二つとは

①『^{しんちようこうき}信長公記』 ②『秀吉事記』(『天正記』とも)

である。この二つは戦国時代のことを書いた史料で「良質」といっていいものである。この二つは人物の一代記のような感じであって は織田信長、 は豊臣秀吉のものである。 の作家は太田牛一^{おおたぎゅういち}といつて織田信長の弓衆である。 の作家は豊臣秀吉のお伽衆^{おうちゆうじゆう}(話し相手)の大村由己である。

この二つのポイントは、それぞれ同時代の人^{ひと}が書いたということである。ある人物の一代記を同時代の人^{ひと}が書くということはそう滅多にあるわけでない。そういう面では貴重な書物である。これは話を面白くしようとかいふ意図がないから、簡素な文章の集合である。しかしその簡素な中に時代の風潮が感じられるものである。また、 は太田の日記が集まったもの、 は秀吉の命令でつくつたようなところがある。そして二つとも同時代の人^{ひと}が書いたから間違いはないだろうと思ふが、やはりあるのである。

では本能寺の変付近のところ^{ところ}で間違いが目立つ。出陣したはずの武将が残っていたりする。特に信長が弓や槍を持って戦う場面はどうも間違いらしい。これは情報源が交錯したり、混乱したためであろう。 では少しあとに書かれたにも関わらず、なかなか信憑性がある。特に秀吉の誕生日(元日ではなく2月6日)のところなどは注目すべき記事も含まれている。

第4章 個人研究（日本史関連）

もう一ついいたいのは、この二つはいわゆる軍記物（戦争の話を記した書物）であるということである。しかも軍記中ではトップクラスの信憑性を誇っているとされる。

これらの史料を詳しく話すと引用ばかりになってしまって、面白くなるのでここではそれは避けたいと思うが、信長・秀吉の人生について同時代の人間の考えが見られて面白いと思う。の方は中央公論社、教育社から現代語訳が出ており、中央公論社からはマンガもある。は現代語訳はないが、人物往来社から書き下し文が出ている。『信長公記』だけでも是非一読をオススメする。